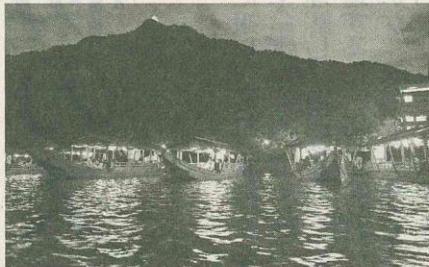


列島 追跡

約1300年の歴史がある長良川の鵜(う)飼いに、かつてのにぎわいを取り戻すと、岐阜市は外国人観光客向けサービス向上に乗りだした。毎年5月から10月まで行われる鵜飼いは同市の観光の目玉で、夜間に行われるため宿泊需要にも直結する。ただここ数年は直結する。ただここ数年は観覧船乗船客は低迷。同じ県内で外国人の人気観光地になっている高山市の刺激を受け、官民あげての外国人誘致作戦が始まった。

岐阜市、鵜飼いで外国人誘客



岐阜市の鵜飼い観覧者数は低迷が続く

船事務所で、春から英語
外国人観光客の案内を担当
している元教員の田口誠さん
(61) は笑顔を見せる。

鵜飼いを運営する岐阜県は、外国人観光客向けに英語の案内を強化している。田口さんのような英語が話せる人材を採用したほか、

にぎわい復活、官民連携

「名古屋のホテルから米国人が鵜飼いを見たいと電話してきた。時間や料金などを説明したら、5人組がやってきた」。長良川の河畔にある岐阜市の鵜飼観覧

県立岐阜高校の英語サークル「ESS」に属する生徒が通訳ボランティアをすることも決まった。鵜飼観覧船乗り場付近で無料Wi-Fiを使えることも決まった。建物だ。25年ほど前に営業をやめており、昨年暮れに市に寄付された。市は有識者の検討会で整備のあり方をまとめ、2018年度に耐震改修などを進める。

い物販店を開いた。場所は観覧船乗り場の近くだ。岐阜の特産品である和傘や美濃和紙、竹細工など、外国人が関心を持ちそうなデザイン性の高い品を中心に扱う。

はど長良川流域の自治体と連携。新たな観光ルートを旅行会社に提案するなど、外国人観光客の取り込みにさらに力を入れる。

日本経済新聞 平成28年7月4日